

奥田亡羊歌集『花』（砂子屋書房）

横山未来子

多様な試み

『亡羊』『男歌男』に続く著者の第三歌集。

第二十七回若山牧水賞を受賞した。

巻頭近くに置かれた一連「いのちの湯気」にまず圧倒される。

・老いゆけば後前おぼろ

いちめんの花野を這うてはばかりなる

・にんげんの体からめるパズルより

お前のほそき腕を引きぬく

・同心円の半分は海、半分は花野。

子どもが老いて生まれる

・廃屋となりて朽ちなば

野に淒き夕映えうつす鏡のこさむ

・そうすべて嘘だつたんだ

眠りゆく枯野の舟に花はあふれ

生と死、愛と性、歳月などが鮮明なイメ

ージと詩的飛躍によつて表現されてい

る。まるで人生の最後に後ろを振りかえ

り、人間とは、この世界とは何だったのか

と問うよな凄みのある一連である。

・弟の学費を払いおとうとの下級生となる
姉の篠田さん

・夕焼けの漢字おぼえてはればれど

夕焼けを見る土手に来ないか

高校生自立支援の相談員として定時制高

校をまわった時期の作。「篠田さん」は弟

をまず学校に行かせるために働き、自分は

その下級生になつたのだ。二首目からは、

これまで漢字を学ぶ機会がなかつた若者の

境遇が思われる。さまざまな背景をもつ高

校生を尊重しつつ見つめる眼差しがあたた

かい。「いのちの湯気」に見られるような

斬新で狂氣をはらんだ作品がある一方で、

これらのやさしく、なつかしい作品がある

ことも著者の特質だろう。

・前の世も来る世も離ればなれにて子を抱

きつつ見るお月さま

・カーテンに巻かれ遊びいる子らの

笑わざる時ゆらゆらとせり

本集には子どもをうつたった歌も多い。

一首目は上句から無常観が漂うが、いま子を抱いていることの確かさも同時に強く伝わってくる。二首目は子どもらしい遊びの場面でありながら、その姿が消えてしまいそうなほかなさをもつ。それは、見ているわれにも子にも時間は有限であることを作者が知つてゐるからではないだろうか。

・にんげんの心いつまで保ちいしか

青い光を見て死にしひと

・元号の変わらぬうちに

七人の処刑は同じ日に終わりたり

紙幅の関係で詞書を引けなかつたが、一

首目は東海村J C O臨界事故の被曝者を、

二首目は麻原彰晃らの死刑執行をうたつた

歌である。これらを含む「平成じぶん歌」

（『短歌研究』の企画による平成の三十一年

間をテーマとした歌）には社会説が多い。著

者がつねに時代や社会との関係を意識して

來た証しだと言えよう。

他にも分かち書き、ボカラロPのtamaGO氏

との共同制作、娘に語りかけるせつなく美しい詩の収載等、多様な試みに満ちている。

・フラワーなピューティフルなり

青空の下であなたと抱き合つていた

歌集名となつた「花」は、この世にある

小さな希望の象徴なのかもしれない。

（三三〇〇円・税込）